

ART ESSAY

アート★エッセイ

「感情論」

安部 泰輔
(現代美術家)



「何をされている方ですか？」と聞かれるたびに「一応、美術家です」と答えている。「どういう作品を作っているのですか？」と問われれば「ヌイグルミみたいなものを作っています」と返し、「詳しくはホームページを検索してください」と、名刺をお渡しする。それでその場は収まるのだが、自分の作品を言葉で表すことの難しさが何となく残る。

「美術家」とはいいながら、その美術という言葉に少なからず不信感を抱きつつ、日々活動が続けてきた。元々絵が好きで、美大を目指すことになり、デッサンを学ぼうと高3の夏から地元の美術研究所に通いはじめた。何をどう描けばいいのかわらぬまま枚数を重ねつつ迎えた1回目の受験に、普通に落ちてしまった。浪人している間はデッサンよりも研究所の先生に紹介された作家さんの手伝いに励むようになり、その後の受験にも2回、3回と普通に失敗することとなった。

美術なんてもういいや、と上京。清掃会社に就職したが、都会での生活は2年と続かず、早々と田舎に舞い戻った。「美術」に対する複雑な感情は増幅

し、それを悶々と抱えたまま数年。展覧会のアルバイトをほとんどボランティアのように続けた。

その間、たまたま与えられた場所に自分なりの表現を試みた。結果、なし崩し的に美術家と名乗り、ヌイグルミ的な作品を作り続けている。

ここ数年の作品は、展覧会場をアトリエとしてその場所に毎日通い、訪れる人々にもらったヒントをもとに公開制作するという形に変化していった。最近では地元の生活の中で生まれるものと、滞在先で出来るものとの違いを楽しんでいる。

美術に対する感情は常に、自分の仕事と周りの物事との距離感を測るモノサシのような道具として機能してきたように思う。ただその感情自体も複雑なので、自分の作品を言葉で表すのは本当に苦手だと感じる。

そういうことなので、この文章を読むよりも実は、カチャカチャと名前を検索したほうが明解なのではないかと思う。画面に映った作品が気になった時は、ぜひ展覧会場に足を運んでみてください。

(あべ たいすけ)



「ふたご森」(広島市現代美術館、2010年)

特集 つながる造形 第3回 つながりの可能性

つながりや広がりを中心にあるもの

インターネットに代表される高度情報通信ネットワークの開発、及びその普及によって、現代は無限のつながりと広がりをもつバーチャル的な地球社会といえよう。音声のみならずリアルタイムで映像が行き来する社会は、時間と空間の制約が取り払われた世界ともいえるが、平成生まれの子どもたちにとっては当たり前の中である。

一時期、情報の光と影について、教育現場に与える影響を懸念する議論もあったが、すでに制御のきかない段階に入りつつあるといえまいか。無限につながった世界、広がった世界にあっては、自分らしさを確立し、主体的に生き抜く力を身につけるために必要な教育の在り方を再検討する時代なのかもしれない。

学校教育においても、ますます確かなコミュニケーション能力の育成が求められているが、口先だけのコミュニケーション技術ではなく、確固たる自分らしさをもって他者と交流する力が必要であろう。そのため、学習の主体である子どもたちが身の回りのあらゆるものとかかわり、その関係をつなげ、広げていくことができるように支援することが大切になる。幸い、身の回りの人やもの、環境などと直接かかわりながら取り組み、学ぶ造形活動は、必然的に他とのつながりや広がりを生み出していく可能性を秘めている。造形教育に携わる者の使命は、その可能性を見極め、その実現に努めながら子どもたちの豊かな情操を養うことにあるだろう。

造形活動から生まれる多様なつながりや広がりにも、それぞれその中心は存在する。その中心こそ、学習主体である子どもたち一人一人であり、その子の「自分らしさ」そのものである。バーチャル的なネットワーク社会であるがゆえに、あらゆる諸感覚を駆使して泥臭いほど全身で取り組み、心をつなげ夢を広げていく造形活動がもつ意味は大きい。

図画工作科・美術科連携のための ささやかな提言

東京都府中市立府中第五中学校校長 中村 一哉

1. はじめに

現在、美術教育における「かかわり」の重要性が様々なところで取り上げられている。思いつくままにあげれば、次のようなものである。

- (1) 社会とのかかわり (生活の中で生きる美術など)
- (2) 人や関係機関とのかかわり (学校と美術館との連携、作家とのコラボレーションなど)
- (3) 校種間のかかわり (小・中学校の連携など)
- (4) 地域間のかかわり (実践の発信・交流など)

このような「かかわり」を通して、美術が異なるものと触れ合いながら、相互にその働きを高めていくことが期待されている。

今年の夏、福島で行われた第63回全国造形教育研究大会では、大会テーマの副題に「連携を大切にしたいこれからの造形教育を求めて」を掲げ、幼児から社会人までを見据えた人間の発達を、美術教育の連続性の視点からとらえて研究が展開されていた。それと言うのも「連携＝つながり」が、今後の美術教育の充実や活性化にとって不可欠な要素との認識からであろう。

そこで、小学校と中学校の連携を中心に、あらためて各校種のつながりを考察し、その課題や取り組みの例を紹介し、今後の可能性に期待を寄せながらささやかな提言をしたい。

2. 違いの認識からの一歩

小学校と中学校の連携の重要性が言われ始めてかなり経つが、その実現はさほど簡単ではない。

それは、極めて現実的な理由からである。

例えば、授業時間の小学校の45分と中学校の50分の5分の差。それが小中の生活時程全体の違いとなり、連携を阻む壁となる。この物理的な差は象徴的で、教科指導の比重や教科担任制の問題、生徒指導や部活動、中学校の進路指導に欠かせない評定の問題など、差異を数えたら山ほどある。だからこそ、連携の必要性も問われるわけだが、それを進める時間を生み出す努力がこれまた難しい。

しかし、そう言ってばかりでは「つながり＝連携」の行く末は悲観的である。解決に向けた一歩は、まず、このような「違い」を正しく認識し、相互に理解するところから始まる。

校種を超えた連携のねらいは、基本的に「教育課程の連携」であり、子どもたちの発達に即した適時性のある指導と成長の支援である。図画工作、美術科のつながりを考える資料として、新学習指導要領に示された小学校、中学校、高等学校の目標を比較して、下段のような表を作成してみた。

各校種が目指す育成内容を比較すると、究極的には「豊かな情操」を養う義務教育と高等学校の相違や「感性」の扱いの違い、中学校から位置づけられる「心情や理解」など、改めて校種ごとに異なる育成内容の差に気づく。

共通点と相違点を明らかにすること、それが「つながり」の第一歩である。

3. 連携の接点としての美術館

ここで身近な取り組みに目を向けてみたい。私

のいる府中市では、教育の基本的な方向性を示す「府中市学校教育プラン21」に「美術教育の充実」が位置づけられており、学校教育と市の美術館との連携事業が進められている。

今年で創立10周年を迎えた府中市美術館の教育普及事業には「小・中学生の鑑賞教室」や「ティーンズ・スタジオ」など、多彩なプログラムがあり、その中の一つに、毎年夏季に実施している美術館の学芸員と府中市の小・中学校の先生方との協力による「ワークショップ」がある。

写真は、今年と昨年に実施されたワークショップの情景である。

平成20年度に東京都中学校美術教育研究大会が、府中市美術館と近隣中学校を会場として開催されて以来、それまで小学生が中心となっていた美術館の事業に中学生も参加するようになってきた。「ふわふわアート」(平成22年度)

造形活動そのものを楽しむことに小学生と中学生の差はない。しかし、いろいろと自分なりの理由づけをしながら形の変化を工夫し楽しむ中学生の姿は、全身で造形活動を楽しむ小学生とは違って、この年代特有の材料や主題とのかかわり、制作へのアプローチが感じられる。紹介する二枚の写真からも感じ取れるように、小学生と中学生と一緒に造形活動を楽しみながら、互いに感想や意見を述べ合うことで、造形に対する経験を深めて

いる。また、時には中学生が説明したり教えたりする活動を見ると、当の子どもたちのみでなく、指導者の子どもを見る目も同時に磨かれる。

今の学校のカリキュラムの中で、小学校と中学校が連携することは、特別な枠組みがないかぎり難しい。美術館という、子どもの美的体験に直接働きかけることができる仕組みを活用しながら、双方にとってプラスの関係を構築していくことが、連携の地ならしをする上で効果的である。

4. 行動としての連携…提言

ここで今後の連携に向けて提言をしたい。できるだけ簡単に取り組めることが基本である。

(1) 指導計画の交換

先に述べたように、学校における小中連携の核は「教育課程のなめらかな連続」にある。題材を通して教科のねらいを育む図画工作科、美術科では、指導計画に指導者の独自性が反映されやすい。そこで、授業に臨む子どもたちが、過去にどのような造形体験を経験し、何を身につけてきたのかを踏まえた上で指導計画を作成することが重要となる。毎年、指導計画の作成時点で、小学校と中学校が相互に年間指導計画を交換し、子どもたちの造形体験の連続性を踏まえた題材設定や指導計画を作成することが連携の礎となる。

(2) 共通の活動場面の設定

府中市の場合、美術館が小・中学校の教育研究会に参加するなど、連携の基盤が構築されてきているが、表現でも鑑賞でも、校種の枠組みを超えて活動できる場面設定を考えることが、継続的に連携を進める際の支えとなる。地域や環境によっては難しい部分もあると思うが、学校以外の第三の支点を得ることが重要と考える。

(3) 部活動の活性化

選択授業が、実質、縮小化されていくことで、美術が好きな子どもたちが生き生きと活動できる受け皿が少なくなる。中学校と高等学校との連携も視野に入れながら、再度、中学校における美術部の活性化を課題にしていける必要があると考える。

「連携＝つながり」は理屈でも理論でもなく、具体的な行動であり活動である。始めの一歩を踏み出す先に、地平が開かれると期待している。

(なかむら かずや)

■小・中学校および高等学校の図画工作・美術の目標の内容比較表

目標 校種	活動(を通して)	美的体験	味わう喜び	育てる心情	感性	身に付ける能力	深める理解	養う
小学校	表現と鑑賞		つくりだす		働かせながら	造形的な創造活動の基礎的能力(培う)		豊かな情操
中学校	表現と鑑賞(幅広い)		美術の創造活動	美術を愛好する	豊かにし	美術の基礎的能力(伸ばす)	美術文化	豊かな情操
高等学校	美術(幅広い)	豊かにし		生涯にわたり美術を愛好する	高め	創造的な表現と鑑賞の能力(伸ばす)	美術文化	



「キラキラへんしんショー」(平成21年度)

つながることの意味 ～個から共へ～

千葉大学准教授 神野 真吾

1. はじめに

人と人とが「つながる」ことは、美術においてほとんど重要視されてきませんでした。美術は、個人の内面を視覚的に表現することだとされ、自己表現のために、自分の精神的内部に深く入り込んでいくことばかりが期待されています。そのため他者と「つながる」ことには、ほとんど入り込む余地はなかったのです。美術教育においても同様だと言えるでしょう。確かに近年においては「鑑賞」の領域において他者の視点を通して、対象の特長を学ぶということも重要視されていますが、実際のところ、表現することに高い比重を置いてきたこれまでの流れの中では、つながることは副次的なものとして扱われていると言えます。

そして「つながり」という言葉からは「群れる」の姿を連想してしまうかもしれません。しかし、「つながる」ことの本質的な意味は、そうした「群れる」状態を目指すことではないはずです。なぜなら、自分以外の他者との関係性を自ら構築し、その関係性を維持、更新していくには、一人一人はみな違うわけですから、様々な軋轢や憤り、不満、違和感などの様々な感情は避けて通れないはずです。したがって、そうした軋轢を無視して、表面的に「つながって」いることは、本質的な「つながり」だとは言えないでしょう。

本稿では、美術を支えてきた近代的な考え方を眺めつつ、現代の美術教育において「つながり」が重要なキーワードとして立ち現れることの意味について考察していきたいと思います。

2. 近代芸術(美術)の意味するもの

さて、今私たちが「美術」という言葉で思い浮かべるものが成立したのは、西洋の近代(18Cから19Cにかけて)だとされています。「美術が成立した」という表現に違和感を覚える人もいるかもしれませんが、個人の思想・感情を、絵画や彫刻な

どの視覚的な表現で表す「美術」は、近代以前には存在しませんでした。分かりにくいかもしれませんが、私たちが今「美術作品」と呼んでいるものは、近代以前には、職人の作った製品でした。そのため、作者の特別な思想・感情の込められたものとして眺められていたわけではなく、その中に込められた作者の思いを想像するという、今では当たり前の鑑賞方法にはほとんど意味がなかったわけです。作品はそれを作った人に結びつけられるよりも、その時代の社会で共有されていた価値を体现するものとして存在していたのです。例えばキリスト教美術では、キリスト教の世界観が様々な画家、彫刻家たちの手によって示されています。その作り手の個性は確かに製作物上に表出していますが、それでも最も重要視されたのは、参照されているその宗教的世界観であって、その上での製作者の個性だったわけです。

西洋で成立した近代主義とは、宗教的あるいは封建的な拘束から個人を解放した考え方であり、運動でもあったと言えます。そのとき、人は自分自身がつくり出した考え方や生産物を他人のそれと区別し、自分のものとして主張し始め、それがその人の存在を周囲に認めさせ、高めるものとなったのです。参照するのは自分の外部にある宗教的世界ではなく、自己の内部となりました。そして、その究極のかたちとしての「芸術」に人々は高い位置づけを与えたのでした。芸術において自分の内なる思想・感情を外に押し出す「表現 express」に重きが置かれ、主観的に個人の内面を表現することが芸術の代表的スタイルとなりました。そして自分が他から際立つため、「人のやっていない新しいこと」に挑戦すること(前衛)に大きな価値が与えられたのです。

それは、芸術に限られたことではないでしょう。私たちは今なお、自己の内部に忠実に自らを表現することを望み、周りから求められています。そして「独創的」であることを望み、求められてい

ます。明治期に西洋に倣って近代化を推し進めた私たちの中には、このように近代主義は深く根を下ろしているのです。教科としての図工・美術は、こうしたメッセージを最も強く発し、まさにこの価値観を体现したものだと言えます。

3. 今を生きる私たちの芸術(美術)とは

昨今、話題となっているハーバード大学のマイケル・サンデルに近い人物にチャールズ・テイラーという学者がいます。彼らは一般的にはコミュニタリアニズム(共同体主義)の政治哲学者だとされますが、テイラーは、西洋近代が生み出した先述のような価値観は、人々を個人主義、自己中心主義へと導き、社会を平板で偏狭な、意味の乏しいものへと至らしめていると指摘しています。これは、個人の自己実現の追求は、結局のところ豊かさにつながっているのかという疑問から発しているものです。

テイラーは、自分が「ほんものauthenticity」となることを理想化する近代的な意識が、典型的なかたちで姿を現しているのが近代芸術だと指摘します。他との差異化を推し進め、自らの個性化を実現しようとする中で、美術の様式は先鋭化され、多様化していきました。その結果、普通の人たちにはほとんど理解不能な近寄りがたいものになってしまったとも言えるでしょう。テイラーの言葉を借りれば、そうしたものの多くは陳腐化した「ほんもの」だということになります。芸術を特権的な一部のエリートのものであると考えたら、その近寄りがたい性質は、神秘性を増し、過大な評価をさせるには好都合かもしれません。そうした芸術のあり方も、ありえないわけではないですが、大多数の人にとって無関係に思える芸術にどのような価値があるのかという疑問も生じます。

近代が生み出した大きな成果を評価しつつも、今を生きる私たちが現実の世界と向き合うのに力を与えてくれる美術のあり方を、私たち自らが生み出していかなければならない時代に立ち会っているのではないのでしょうか。それは、前提となる知識や理解のための努力を要しない、誰にでもわかるものが良いということでもありません。既にわかりきったものを確認することは、娯楽としては良いでしょうが、私たちの精神活動に欠くことのできない重要なものだとは言えないでしょう。

4. つながることの意味

再びテイラーの話に戻ると、彼は近代の課題である自己中心主義による世界の意味の喪失を克服するには、「重要性の地平」を共有することが必要だと指摘しています。自己の欲求を超えた重要な事柄を参照することを通してしか、自己実現は意味をもたないということです。そして「重要な事柄」は自明の固定的なものではなく、多様な価値観をもつ者同士が対話を通じて切り開くものだとしている点も指摘しておくべきでしょう。「つながる」ことは、ここにおいて二つの意味をもつことになります。一つは他者と対話的に「つながりながら自己のアイデンティティ(自分らしさ)を形成していく」という意味で、そしてもう一つは、その対話を通じて形成されるアイデンティティは、他者と共有しうる地平に「つながっている」ということです。

これまでの美術が、自己の内奥に自分らしさを求め、それを表現することに拘泥してきたことは、近代化の過程として捉えるならば決して間違っていない。しかし、現代社会では、個人は自由になった一方で孤立し、小さな単位の集団や空間に閉じこもり、きわめて矮小化された生を生きるを得ません。このことがもたらす様々な過酷な現実、多くの深刻な問題は周知の通りです。生きることの意味を見出すためには、多くの人たちとつながり、共有可能な重要な地平を対話的につくり上げていくことが求められているのです。

美術・図工は何かを「つくる」という教科であるという意味でも、それを視覚的、感性的に提示することができるという意味でも、現代においてとても大きな可能性と責任を有しています。その責任を全うするためには、主観的表現主義というこれまでの美術の支配的な枠組みを組み替え、対話的に自己を形成することを通じて、共有可能な価値観を自分らしく表現することへと至る必要があります。そのとき、この教科は単なるものづくりを超え、豊かな社会を形づくる上で重要な役割を果たすものとなるはずです。そのためにも、図工や美術で行われる活動は、自己の内部だけを参照する独白的なものではなく、他者とつながることを通じて自己を形成していくような対話的な質をもったものとなるべきなのです。

(じんの しんご)

つながりの中で躍動する子どもと教師 ～新たな学びへ、新たな出会いへ～

九州女子大学准教授 谷口 幹也

1. 未来をつくる子どもたちのために

今、人と人との「つながり」が問題だ。現在の日本社会は、新自由主義を背景とする極端な個人主義が蔓延し、地域社会においては、地域とのつながりを失った家族、経済格差に疲弊する親たちなど、磨耗する孤独な人々の増大といった問題を抱えている。教育の世界においては、日本の社会問題が教師たちを直撃している。そこで多くの教師が子どもたちとしっかり向き合い、子どもたちとのつながりを実感することを望んでいる。こういった状況において私たちは何を考え、何をしなければならないのか。本稿では、筆者が出会い、多くのことを学ばせていただいた二人の指導者の活動を紹介し、未来をつくる子どもたちに対し、私たちにできることとは何かを“つながり”をキーワードとし考えていきたい。

2. つながる子どもたち

①美術館での鑑賞活動

—不思議との出会い、「？」から始まる学び—

大阪市立上福島小学校・内部恵子先生は、小学校の近くにある国立国際美術館で経験した一個人としての驚きと感動をもとに、子どもたちとともに「新たな学び」をつくれなかと動き出した。そして実現したのが、美術館でのクラス全員による鑑賞活動だ。子どもたちが言葉を発することから始まる作品鑑賞では、作品に対する感情移入や共感、他者とのやりとりを通してまなざしの受容など知的活動が展開される。子どもたちが果敢に作品に挑み、問いを投げかけ、そこから新たな読みを引き出していくプロセスは、多くの学びの種を生み出す。ちょっとした疑問からたくさんの言葉が生まれ、子どもたちの声が、次から次へとつながっていく。内部先生は、「美術の知識」の獲得を目的とした授業をつくるために動き出したのではない。不思議に思うことの大切さ、未知なるも

のとの出会い、「？」から始まる学びを通して子どもたちの成長を願い、動き出したのだ。



国立国際美術館「小川信治展—干渉する世界」での学びの一場面

②キッズ・キュレーター

—社会とつながる・世界とつながる—

次にアートプロジェクトに参画する活動を紹介したい。横浜山手中華学校・王節子先生は、横浜トリエンナーレ2005総合ディレクター・川俣正氏との出会いを通してキッズ・キュレーターの活動を想起し、子どもたちとともに活動を開始した。

この活動では、子どもたちが会場に展示されている作品を自由に選び、メンバー一人ひとりが自分の言葉で作品を紹介する。子どもたちは、来場者という多様な「未知なる他者」に向けて、作品のどこが好きで、何に惹かれるのかを語り、他者に思いを伝える「難しさ」と「もどかしさ」、そし



横浜トリエンナーレ2005における活動風景

て「おもしろさ」を経験する。キッズ・キュレーターの活動において、子どもたちは、自らが動き出し、工夫を重ねることによって得られる達成感を経験するのだ。この未知なる他者に関わる試みを通して、子どもたちは驚くほど成長する。

3. 出会いとつながりの中で育つ

これらの活動の背景には、「子ども一人だけでは豊かな学びを経験することはできない」という内部先生、王先生の教育者としての経験に基づく確信がある。二人を突き動かしたのは「出会いとつながりの中で育つ子どもたち」というヴィジョンだ。二つの事例は、世界と関わり他者と関わる力をどのように形成するのかという問題を、図画工作科、美術科を通して取り組んだ事例といえよう。「つながりの中で育つ子ども」という言葉に関連することを、美術評論家の中村英樹氏が以下のように述べている。

「これまでの個人主義による『個人』の概念に留まっていたのでは、この先の芸術や社会は成り立たない。むしろ、『個人』の概念そのものを刷新する必要がある。『他者との関係性からなる個人』の確立が今日における全人類的な課題でさえある」^(註1)

これは、今日の日本社会が抱える問題に対する危機意識に起因する言葉である。日本の社会は、本稿の冒頭において述べたように、つながりの希薄化と喪失という問題を抱え、大きな岐路に立っている。教育の世界においては、度重なる方向転換の中で見失いつつあるものを見定め、取り戻させねばならない。その見失いつつあるものの最たる例が「つながり」なのではないか。私たちは、教育現場において、他者との関係性からなる個人の確立を考えていかねばならない。そして、「つながりの中で育つ子ども」＝「他者との関係性からなる個人」という学びの主体をイメージし、学校を、一つひとつの授業をデザインしていかねばならないのではないだろうか。

4. 普段の授業の大切さ

先に示した美術館での鑑賞活動、アートプロジェクトへの参画の事例は、特別な例、学校の立地場所など、多数の幸運が重ならなければ実現しない「非日常の学び」なのではないかという言葉も聞こえてきそうだ。しかし、二人の指導者は、特別な行事、イベントとして子どもたちを学校外に

連れ出したのではない。学校での日常の学びの延長線上として学外での活動を行っていた。二人が私に強く教えてくれたのは、「つながりを意識した学びの重要性」、「普段の授業の大切さ」だ。

二人は、「多様なつながり」を意識して授業をつくり出していた。内部先生は「子どもどうしのつながり」、「教科をこえた学びのつながり」。王先生は、子どもたちそれぞれの存在がどこに由来しているのかという「アイデンティティのつながり」、「世界とのつながり」を意識している。私たちは、普段の授業において「つながり」をもっと意識してよい。様々な場所で、様々なモノやコトとのつながりを学ぶ機会をつくることできるはずだ。それこそが図画工作科・美術科の今日的な役目であり、可能性なのではないだろうか。

5. つながりの中にある教師

私たちは、世界と関わり自己を形成し、他者とかかわりつながることによって社会を形成するという人間の根源的な在り方と、その基礎的な能力の育成をどのように保障するのかという問題を忘れてはならない。そしてそのために日常的な学びの出発点とは何かを検証しつづける必要がある。

本稿で紹介した二人の指導者は、社会の現状、学校の現実に憂えているだけではなく、自身の感動と驚きの経験をもとに動き出していた。そして多くの共感者、協力者を得て、新たな学びをつくり出していたのである。二人は“つながり”の中に、自身が存在し、つながりの中でこそ教師としての可能性を追求できるということを知っていたのではないだろうか。

筆者は、美術教育における「遊び」と並ぶ重要なキーワードの一つが「つながり」なのではないかと考える。そして、子どもたちが、様々なつながりの中に存在する自分自身を実感し、自らの力で新たなつながりを見出し、未来を切り開いていくことを願うのだ。出会いや感動を通して“新たなつながり”を見出すこと。それは、子どもたちにのみ期待することではなく、私たち大人自身が常に考え見出さねばならない成長の種、きっかけなのではないかと考えるのである。

(たにぐち みきや)

* 註1 中村英樹『視覚の断層 開かれた自己生成のために』現代企画室、2003年、174頁

美術館でつながるもの ～夏の葉山にて～

神奈川県立近代美術館学芸員 稲庭 彩和子

1. はじめに

神奈川県立近代美術館の葉山館は、海を一望でき、振り向けば青々とした山の緑がまぶしい風光明媚な場所に建っています。天気の良い日に訪れば、リフレッシュできること間違いなしです。この葉山館で、夏休みに県や地元の教育委員会と連携した学校の先生向けの美術館活用講座を毎年数回開催してきました。受付の担当者によれば、うれしいことに毎年申し込みはすぐにいっぱいになるそうです。美術館と葉山というキーワードが夏の旅心を誘うのかもしれませんが。

そんなふうに講堂に集まった先生方に挨拶をして、「まずは展示室の中をぐるっとまわって来てください。作品をじっくり鑑賞する時間は後でありますから、館内の雰囲気を見てくるだけです」とお願いします。この時間約15分。人間は自分が今どんな場所にいるのかを確認しないと、実は心を落ち着けることができないそうです。今いる場所の全体の雰囲気を把握してもらうことで、その後のリラックス度と集中力が上がります。

また、美術館についての研修なので、講堂で話す前にまずは美術館の展示室で作品が発するエネルギーをシャワーのように浴びてきてもらうのです。



2. 美術館はなぜデートに使われるのか

講堂に戻ってきた先生方に質問をします。「美術館はなぜデートに使われるのでしょうか？」これをグループに分かれて3分間話し合ってもらいます。「え！」と一瞬先生方は驚きます。研修には教師として参加しているわけですから、いきなりプライベートを想定するのはギャップがあるからでしょう。誰でも日常の中で「親」や「教師」など自分の役回りを演じているわけですが、そうした立場を一端ご破算にして、一個人としての経験から美術館体験について考えてみてもらいたいという意図がこの質問にはあります。

みんな最初は一瞬固まりながらも、何となくニヤッと顔を見合わせて、ポツポツと話を始めます。自分の体験を思い出したり、映画館など別のデートの場所を想像して比較してみたり、個人の経験や考え方が比較的ストレートに出てきます。5人ぐらいまでだと、こうした意見の出し合いはうまくいきます。3分が経って各グループの一人に、美術館がデートに使われる理由を発表してもらいます。

「相手の好みや価値観を知ることができる」「作品と一緒に見ていることで、話さなくても何かを共有できる」「美術館を離れてからも、二人の間で

話しのネタになる」「公立ならお金も意外とかからない」「レストランやミュージアムショップなど展覧会以外にも楽しめる場所がある」「非日常的な空間で無になれる」「作品と一緒に見ることで、お互いの距離感を縮められる」「いつもは考えられないような深いことを一緒に考えられる」「お互いバラバラで作品を見ていても、同じ展覧会を見ていると共有できるものがある」など、様々な意見が出てきます。

3. 価値観のキャッチボールの場合

「美術館はどんなところですか？」と聞くと、名画を見る場所というような答えが返ってきそうですが「なぜデートに？」の質問に対しては、名画が見られるからという答え方をした人は一人もいませんでした。もっと内面の動きについての回答が多くなります。カップルが美術館でデートするとき、その前提に「何かを共有したい」というポジティブな気持ちがあることがポイントです。作品を同時に体験していると、お互いが興味をもった点をポツポツと話すだけでも、価値観のキャッチボールがうまくいき、価値観を交換する速度や深さが増すのです。「非日常的な空間で無になれる」という意見がありましたが、美術館の空間は日常の役割やしがらみから解放されやすく、今ここに自分の感じ方に耳を傾けやすくなっている、「いつもは考えられないような深いことを一緒に考えられる」機会となるのです。

美術は、もともと人々と世界とがどうつながっているのかを理解するために、寺や教会の中でも育まれてきたメディアです。宇宙とは何か、人間とは、生命とは、といった本質的な問いについて美術を通して考えてきたので、美術館が深い問題を扱いやすい場となるのは当然のことかもしれません。美術館は鑑賞体験を通して人々が何かを得られるように、空間や時間がつくり込まれている場所なのです。デートをする二人の間で価値観のキャッチボールがうまくいくことは、おそらく最重要課題ですから、美術館がデートの場として選ばれるのは自然なことなのです。

4. 視覚体験を深める言葉の力

鑑賞体験とは「作者と鑑賞者」や「鑑賞者と鑑賞者」の間で価値観のキャッチボールをしている体験であるということをデートの例から見てみましたが、この鑑賞体験は、実は視覚から得た情報に加えて言葉が重要な役割を果たします。

カップルの二人は、今見たものをネタに「あの作品の深いブルーがよかった」とか、「私は〇〇だと思う」などといった言葉に変換して、確認をします。相手に言葉で伝えようと思った瞬間に、よく見て、言葉に変換するために詳細な情報を求めようと目をこらしているはずです。もしくは、自分の記憶の中にあるその作品のイメージを言葉

に変換しようと、自分が感じたことをもう一度なぞって思い出しているはずです。例えば、「あの美しい瑞々しい青」を伝えようとしたとき、その自分自身が感じているありありとした微妙な質感は言葉では伝えきれないことはわかっていても、それを言葉に変換して伝えようと思うことで、自分の感じていることを詳細に探ることにつながるのです。

つまり自分の言葉で、自分の感覚を誰かに通訳してあげることは、自分の感じ方を振り返り、客観的に、より明確にするきっかけとなるのです。言葉に変換することで、自分自身がその感じ方を客観視できるようになり、それを相手と共有することによって、自分の感じ方を肯定する行為にもなります。

5. みる力は、つくる力につながる

学校での図画工作や美術はつくる活動が圧倒的に多いと思いますが、鑑賞力はつくる力につながります。そして、つくる力や鑑賞する力は、言語活動とともに深まります。鑑賞力とつくる力と言葉の表現力の3つの要素はすべてが絡み合っているのです。実際、現役のアーティストたちにインタビューをすると、作品を制作する際に、膨大なイメージを頭の中に思い浮かべていることがわかります。その膨大なイメージは、ゼロから突然生まれるのではなく、視覚体験の積み重ねと、それを意識化することによって育まれていくのです。その視覚体験を意識化するツールのひとつが言語で、あるイメージは誰かとの言語的コミュニケーションを通して、深まったり広がったりして作品として結実していくのです。

学校の先生を対象とした研修では、当館が制作した鑑賞キット『Museum Box 宝箱』を活用しながら、「美術館と学校のつながり」と「鑑賞と造形活動のつながり」についてワークショップ形式で考えていきます。美術館と学校はそれぞれ役割がずいぶんと違いますが、だからこそ「つながる」ことで1 + 1 = 2以上の成果が出る可能性が潜んでいるのではないのでしょうか。

(いなにわ さわこ)

*上記教材の貸出についてはウェブサイトを参照の上、神奈川県立近代美術館に直接ご連絡下さい。

子どもの椅子

FROM

愛媛県松山市立みどり小学校
岡本 知子



シャボンワールドへようこそ！

毎日元気いっぱい2年生。絵をかくのが大好きです。そんな子どもたちに「シャボンワールドって、どんなところだろうね？」と問いかけると、「空の上だから宇宙かな」「カラフルな色の花畑だよ」「雲の上に遊園地があるといいね」と口々にお

しゃべりが始まりました。赤・青・黄色…色とりどりのシャボン液。子どもたちは、それを見たたん、目を輝かせました。ストローを配ると、もう早くシャボン遊びがしたくてたまりません。中庭へ飛び出し、シャボン液の模様づくりを始め

ました。初めは戸惑っていた子どもも、すぐにブクブク、ブクブク、もう夢中です。あっという間に泡の山ができ、画用紙の上には泡、泡、泡…。「きれいだね」「次は何色にしようかな」。ところがしばらくすると、大きな泡が風に飛ばされたり、シャボン液がこぼれたりして失敗する子どもが出てきてしまいました。そこで、その翌日。子どもたちが欲しい色を補充し、シャボン液の濃度も濃くしました。さらに、一人で作業していたのをやめて、友だちと共同ですることにしました。すると、前日は「模様がしみだらけ」「色が濁ってしまった」と困惑していた子どもたちも、「見てみて、こん

な形ができた」「きれいな色だね」「この模様おもしろいよ」と、どの子どもも大満足する模様が出来上がりました。



一週間後、いよいよ自分の思い描いたシャボンワールドを絵に表すときがやってきました。最初にみんなで見立て遊びをしました。「この形は何に見えよう？」「画用紙をひっくり返すと、違った物に見えてこないかな？」と問いかけると、「犬の形

に見える」「くじらが見えてきたよ」「これは花になりそうだね」と徐々に言葉が行き交うようになりました。

「シャボンワールドを絵に表そう」と投げかけると、勢いよくクレヨンやカラーペンが動き始めました。シャボンの形をなぞったり、カラーペンで自分や友だちをかき加えたり、パステルで色を増やしたり、どんどんシャボンワールドの世界が広がっていきました。

「もう1枚かいてもいい？」と、2枚目へ取りかかる子どもも出てきました。子どもたちの集中力は途切れることなく、さらに発想は豊かになっていました。どの子どもも見立て名人に

なり、自分のかきたいイメージが次々と思いつかんできくようでした。

「自分の思い通りにかけた」「今までで一番楽しかった」「また何回もしたい」「最初はアイデアがわからなかったけど、後からどんどんわいてきた」と、どの子どもたちからも達成感や成就感が伝わってきました。

鑑賞会では、「すてきなシャボンワールドだね」「おもしろい形を見つけたね」「泡の模様が絵に合ってるね」「ぼくは、ドラゴンに乗って冒険に出かけるところだよ」など、互いに作品への思いを分かち合い、笑顔がたくさん見られました。

(おかもと ともこ)

図工室

図工の授業で生きる力を育む

長坂 博子(愛知県岡崎市立岩津小学校)

本年度、15年ぶりに小学校1年生の担任をしている。1年生の1学期前半というのは、全ての文字を学習していないために、国語科や算数科をはじめとする各教科で、色をぬって気持ちや数を表したり、感じたことや思ったことを絵で表したりすることを多くの場面で求められる。こうした活動を見ていると、線や形、色で自分の思いを表現することのよさや大切さに改めて気づかされ、子どもたちが自己表現をするための図画工作の果たす役割の大きさを感じる。既成概念にとらわれない1年生の子どもたちの作品やその制作活動を見ていると、感性の豊かさを感じる。S君は、4月末に行われた遠足の絵を描いたとき、前日から続いていた雨が遠

足に出かける直前にあがり、晴れて出かけられたうれしい気持ちを画面いっぱいに描いた。周囲を木々でおおわれた円形の広場で、お弁当を食べている様子のその絵は、まるで空に浮かぶ丸い島のように描かれていた。S君に絵について尋ねると、「上を見たらね、空が丸くて、ぼくたちはその中にいたよ。その空には太陽が見えていて、太陽とぼくたちがいっしょになっていたよ。」と答えた。この絵は、S君が見たときのうれしさが感じたまに描かれている。

子どもたちのものの見え方や感じ方は、作品を通して見るこ

とができる。作品について考え、手をはじめとする体を使って制作し、その作品について語り合う図画工作の授業は、生きる力を育む要素をいっぱいもっている。これからも、図画工作の授業で生きる力を育てていきたい。(ながさか ひろこ)



「はれてうれしかったよ」

美術室

美術室は「特別な教室」

田中 千鶴(東京都中野区立第九中学校)

我が校の美術室は、非常に年季が入っている。床はシミだらけ。木の教卓の天板は塗料や彫り跡でデコボコ。前板もへこんでいる。でも、ちゃんと補修してある。壁側にしつらえられた棚は、垂木や合板の手づくり感あふれるものだが、角が丸く安全で使い勝手がよい。確かに古い。けれど、前任の先生方が年月とともに入れ替わり、その都度手を加え、使いやすく工夫して、現在に至っている。

着任して5年。だいぶ私らしくカスタマイズされてきたこの美術室は本当に居心地がいい。休み時間にはなるべくこの場所

にいて、生徒を出迎える。授業は週1時間だから、できるだけ生徒と向き合う時間を大切にしたいと思っている。

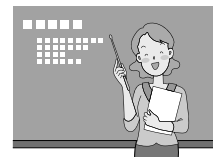
授業では始めに自分の思いや気持ちを生徒に説明する。作品制作を通してどんな力をつけてほしいか、どんな作品をつくってほしいか。そして一人ひとりの、どんなふうに表現したいのかをよく聞いていく。1時間の授業の中 devenir 全員と話す努力をしている。

生徒は、作品をつくる過程で満足感を得たり、作品が完成したときには達成感を味わったり

してとても「イイ顔」を見せてくれる。美術室では、そんなうれしい瞬間にも立ち会うことができる。

この美術室で、たくさんの生徒の3年間の成長を見てきた。「先生。私、高校で美術を選択したんだよ！」卒業生からのうれしい報告を受けるのも、放課後のこの美術室。

今までも、これからも、ここではたくさんの会話がなされ、様々な作品が生まれていく。前任の先輩たちから引き継いだ大切な美術室で、これからも楽しみながら制作にかかわってきたい。(たなか ちづる)



もっとつながれ もっと広がれ 私の世界！

山形県山形市立第一小学校 張崎 正裕

1. はじめに

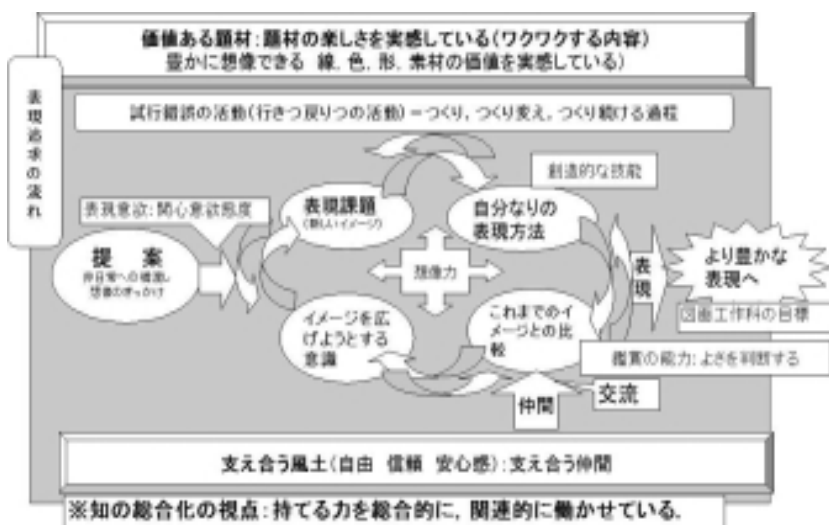
図画工作科の時間では、子どもは「つくる」を通して外の世界に働きかけたり、働きかけられたりする関係を展開し、知識や技能、態度などを学び、自分の行動を修正したり、新たな知識を獲得したりするなどして学んでいる。したがって、「つくる」は、文化や社会の価値や意味を体験することにはかならない。「つくる」学習の特徴を次のようにまとめている。

- (1)何をどうするのかのすべてをつくり手が、一人で考え、とり行うことができる。
- (2)一見関係、関連のないものを組織立てて構想し、作品として統合させている。
- (3)表現する内容や対象を自分の世界になぞって理解し、創造的な想像力や感性、技能などの資質や能力を自在に働かせている。
- (4)直接働きかけることによって発生する対象の変化をその場で実感でき、さらに働きかけて、対象を理解し自分の行動を了解することができる。活動の終了を自分で決めることができる。



2. 試行錯誤と子どもの自立

子どもが夢中になって造形表現をしているときの子どもの思考と活動の流れを、下の図のように考えたい。このような試行錯誤の造形活動の流れができたときに、子どもは自律的に学んでいるといえるし、それは、まさに「自立」した姿である。その結果、子どもたちはつくり・つくり変え・つくり続ける過程で学びを展開することができる。さらに、子どもたちの自己選択、自己責任、個の存在意味を支えるものは、子どもたちの属する集団(コミュニティ)の風土である。つまり、子どもの所属する学級やグループが支え合う風土をつくっているかどうか、大事なポイントになる。よって、図画工作科の授業においては、教師と子どもの関係、子どもと子どもとの関係が表現に直接反映される。子どもの表現活動が、学級の風土をつくっていくことになる。



3. 「かかわり」を通して表現を広げる題材

以上のことから「つくる」意味と「かかわり」による「試行錯誤」の活動に関する題材提案をしたい。

○題材名「もっとつながれ もっと広がれ 私の世界」

(1)学年：第3学年、時間：2時間

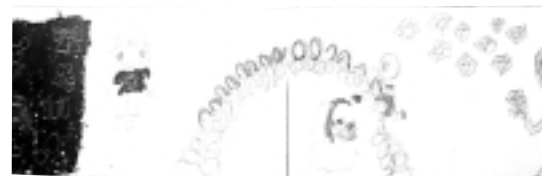
(2)材料・用具

白い厚紙(約10cm×20cm)、鉛筆、ペン、クレヨン、パステル、絵の具など

(3)授業の展開

①提案Ⅰ「自分の大好きな場所や行ってみたい場所を想像して、厚紙に表現しよう」

- ・厚紙の縦、横にこだわらず、思いのままに表現させる。
- ・複数枚かくことを認める。ただし、「ていねいに」「詳しく」表現すること。これは、自分の思いを表現になぞっていくためである。



②提案Ⅱ「自分の世界をもっと広げよう。隣の友だちの絵とつながろう」

- ・友だちの作品と自分の作品をつなげる。
- ・作品に道路、橋、トンネル、はしごなどを互いにかき入れていき、自分の作品と友だちの作品をつなげる。このとき、自分の表現と友だちの表現をお互いの中で統合させたり、整理したりしていることになる。

③提案Ⅲ「もっともっと広げよう。グループや他のグループの友だちと もっとつながろう」



・隣の友だちだけでなく、まわりの友だちともつなげていく。これらの活動を通して、子どもに新しい価値観がつけられていく。

・広がること、つながることを楽しむ。

・厚紙を壁につなげて貼り、学級全体で交流しながらつながりを楽しむ。

(4)「人とかかわる 人とつながる 人と響き合う」

本題材の特徴は、自分の表現を友だちとの直接的な「かかわり」を通して広げていくことである。写生やお話の絵などの表現活動とは違って、友だちや教師との交流が、実感や感動を生み、表現の思いを広げていく。また、「つなぐもの」(橋、虹、道路など)によって、自分の世界をふくらませていくことである。これは、これまでに自分にはない価値観と価値観を統合していくものであり、「知の総合化」であると考えられる。

「人とつながる」には、つながろうとする子どもの意志が高まらなければならない。そのためには自分の表現、考えに対して「自信」がなければならない。よって、ここの展開を丁寧に指導することが大事である。「自分の大好きなところ」「行きたい国、世界」「夢見る世界」など、子どもの思いが表出されやすい言葉で提案することが有効である。

「人とつながる」とは、つながろうとする意志をもった子どもどうしが互いに求め合い、つながり、表現活動を行う姿である。これらの「つながり」が集合体となって、大きな表現の流れができていく姿を「人と響き合う」ととらえたい。

4. 実感、感動のある授業をつくる

「コミュニケーション」を中核にして、授業を見直すと、これまで子どもどうしの交流が直接的に表れる実践が少なかったように思う。交流を通して子どもが自律的にどんどん表現を進めていく姿は、見ていて本当に頼もしく、心洗われるように感じるものである。実践を通して気づかなかった一人一人のよさに気づかせてもらった。子どもたちの姿から、自分の偏った見方を正してもらったような思いがする。

(はりさき まさひろ)

写して発見！「立体絵文字」

熊本県熊本市立湖東中学校 西尾 隆一



「町」

1. 題材について

本題材は、立体化した絵文字をカメラで撮影し、新しい発見をしていく題材である。絵文字はレタリングを主体としての授業展開が一般的だが、ここでは、感じ取ったことや考えたことなどをもとに、心豊かに表現する構想を練り、立体や平面を組み合わせ、創造的な立体絵文字をつくっていく。仕上げてデジタルカメラで映像を収めるという手順をとっている。

具体的には、「漢字の形」や「その意味」から受けるイメージを、文章化し、アイデア・スケッチする。これらをもとに、話し合い活動として、プレゼンテーションと意見交流を全体で行い、情報を共有化した後に、さらに発展的な構想へ結びつけていく。その後、身近な材料を用いて、立体や平面を組み合わせながら立体絵文字を制作する。

完成後は自由に作品を配置し、デジタルカメラで光やフレーミングを考えながら映像を収めるという手順をとっていく。

2. 授業の実際

(1) 構想～どんな絵文字にするか考える

「漢字の形」や「その意味」から受けるイメージを文章化し、アイデア・スケッチする。



(2) 意見交換～構想についてお互いに話し合う

話し合い活動として、プレゼンテーションと意見交流を全体で行い、情報を共有化した後、さらに発展的な構想へ結びつける。



(3) 制作～材料の特性を生かし、創造的に表現する
身近な材料を用いて立体や平面を組み合わせながら立体絵文字を制作する。



(4) 写す～フレーミングを生かし作品を撮る

完成後は自由に作品を配置し、デジタルカメラで光やフレーミングを考え映像を収める。



3. 学習過程の工夫

造形活動は豊かな感性を育んでいく上で、表現と密接にかかわるものであり、切り離すことができない重要なものと考えている。子どもたちの実態をふまえ、子どもたちが能動的に活動できる造形活動を追求していくため、様々なアプローチについて試行錯誤した。

ここでは、作品の美しさを感じ取ったり、想像力を働かせ、見方や感じ方を深め、感性を高める方法として本題材を実践している。絵文字を立体的に制作し、イメージを多くの人々に伝えるために、表現の構想を練ってカメラで撮影し、作品を通してお互いの表現のよさや個性などを認め合っていく方法を研究している。一連の学習過程の工夫を試みることで継続的な学習意欲の充実をねらうことができる。

美術表現の苦手意識から解き放つための手段として、デジタルカメラを使って造形的なよさや美しさを追求すると、表現の幅を広げることができる。次に「どうすれば表現意図が一番伝えられるか」に着目させ、自分の感じているイメージを意識的につくり出させる。そのためにも、教師自身が題材に感動しながら作品と向かい合い、生徒の作品への関心と学習意欲を引き出すことが大切である。また、撮影では一人ひとりが意欲的に活動できるように、状況に応じたアドバイスをを行い、鑑賞活動では発表者に対して拍手でねぎらわせ、発表・発言がしやすい雰囲気づくりを心がける。

4. おわりに

この活動を通して子どもたちは自分なりの意味



「飛(ぶ)」

や価値をつくり出し、同時に多様な価値観があることに気づき、自信をもった造形活動へとつながる。作品などに対する思いや考えを説明し合うことにより、さらに対象の見方や感じ方を広げ、思いを伝え共感し合いながら豊かな人間関係・充足感を得ることができる。



「見(る)」



「人」



「追(う)」

(にしお りゅういち)

アートをつなぐ、アートでつなぐ ～栃木の現在～

栃木県立美術館特別研究員 島 一嘉

栃木県内では様々な連携や教育普及活動が行われていますが、ここでは現在進行中の栃木県全体を対象にした、二つの活動についてご紹介します。

■ 栃木県立美術館で行っている 「県美アートクルーズ」

近年、学習指導要領において学校の図工・美術の時間における鑑賞の重要性が叫ばれ、一部の学校では美術館の活用が行われるようになってきました。しかし、その一方で、交通手段を確保できないために利用は困難との声も、現場から多く聞かれます。そこで、栃木県立美術館ではそれを少しでも解消し、多くの児童・生徒たちが日本および海外の美術作品を体感し、さらには現場の先生方にも鑑賞活動のより有効な指導法を模索していただくことを目的に、平成20年度より県公用バスを無料で貸し出す「県美アートクルーズ」（希望の1か月前までの申込制、1回に28人乗りのバスを2台まで運行することができる）を始めました。（活動内容などは当館HPでご確認ください→<http://www.art.pref.tochigi.lg.jp/jp/education/index.html>）

平成20年度は小学校6校、中学校2校、高校5校、合わせて600人、平成21年度は小学校9校、中学校6校、高校4校、合わせて1100人を超える児



「県美アートクルーズ風景 2010年8月18日」

童・生徒、先生方が利用され、美術作品と出会う体験をされました。校種別に見ると、小学校では学年末の図画工作の授業での利用が、中学校では夏休み中の美術部での利用や美術の授業での利用が、高校では美術の授業での利用や夏季休業中に美術館展覧会レポートといった課題のために利用されるケースが多いです。（バスを用意することが、課題の提出率を上げることにつながっているそうです。）

また、「県美アートクルーズ」を利用されている学校でも「初めて美術館に来た」という児童・生徒が多く、家庭では美術館を訪れる機会はまだまだ少ない状況にあるようです。児童・生徒たちが美術館を訪れるチャンスとしてどんどん活用していただきたいと思います。

■ 〈美術〉をキーワードに栃木をつなぐ 「あーとネット・とちぎ」

当館の事業ではありませんが、栃木県では栃木のアートシーンを活性化するため、2005(平成17)年に、県内の美術関係者によって美術鑑賞教育ネットワーク(通称あーとネット・とちぎ→<http://www.artnet-tochigi.org/artnet/>)を設立しました。

具体的な活動には、HPの公開と毎月の定例会があります。HPは県内で行われる美術イベントのお知らせ、定例会の報告、各学校部会の実践報告の公開などを行い、美術鑑賞や授業に役立つ情報を提供していくことを目標としています。

定例会は見る側、見せる側双方の考え方を理解し合いながら、よりよい美術鑑賞の方法を模索していくことを目標にしています。これまでに次のような活動を行いました。

美術館と学校の双方で活用可能なワークシートを考える「ワークシート研究会(2006年度)」、鑑賞時に役立つ小道具の開発を行う「鑑賞ツール研究会(2007年度)」、眼ばかりでなく手で触れることで鑑賞の理解をさらに深めるためのツールを開

発する「体験ツール研究会(2008年度～)」、HP上に県内の野外彫刻の地図を製作する「あーとマップとちぎ(2009年度～)」、油圧を使った平圧式版画プレス機の開発を行う「版画プレス機製作ワーキンググループ(2009年度～)」を立ち上げました。美術館の鑑賞時や授業の中で使用できる教材の開発などを行うとともに、〈美術〉をキーワードに異校種、異業種の方が集まり、ネットワークを広げていく場にもなってきました。

造形ピックアップ

感性と知性の出会い 心うるおす造形活動

北海道函館市美術教育研究会研究部 佐々木 善憲

1. 「創造！ときめき！実感！」

7月28日に第60回全道造形教育研究大会函館大会を実施し、北海道、青森、関東から約350名の幼・小・中の先生方が集った。大会テーマ「創造！ときめき！実感！」、研究主題「感性と知性の出会い 心うるおす造形活動」のもと、幼・小・中の授業公開と提言を通じて、人間にとって不可欠であり、造形教育の原動力となる「感性」や「知性」を有機的に関連づけた実践について研究協議を行った。

また、講演会では、文部科学省より奥村高明教科調査官をお迎えし、子どもの絵の見方を通しての大変貴重なお話を伺うことができた。

2. 心うるおす造形活動とは

私たちの研究テーマに掲げた「心うるおす造形活動」とは、授業に感性と知性の出会いを具体性をもって意図的、有機的に設定し、子どもたちが



定例会は、一部の美術館学芸員と教員、社会人の方が参加していますが、将来的には、幼稚園から大学の先生、学芸員や教員を目指す学生、美大生、アーティスト、ギャラリスト、一般の方まで参加するコミュニティの場として発展できたらと思っています。また、ネット環境を生かして、県内にとどまらない情報や意見の交換の場としての役割も担っていければと考えています。

(しま かずよし)

もっている感性や知性を揺さぶり、心に働きかけていくことである。そこから以下のような子どもたちの変容を目指し実践研究を行った。

- ①自ら喜び、達成感、連帯感、共有感などを実感できる。
- ②主体的かつ意欲的に造形活動へかかわることができる。
- ③豊かな想像力や表現力を身につける。
- ④作品のよさや美しさを感じ取り、味わい、理解を深める。

特に、学習構築のためのポイントの設定、共通事項や言語活動を意識した学習を大切にし、新学習指導要領の具現化を図るとともに、基本的なコンセプトとして、若い先生方や図工・美術を専門としていない先生方にもわかりやすい大会を実施していこうというものであった。

3. 大会を終えて

北海道では、毎年夏に開催している歴史ある大会である。函館では、5年ぶりの大会であり、渡島、檜山の両美術研究会の協力を得ながら、大会を無事に終えることができた。研究会会長を中心に、小中学校のアラフォー世代の会員が主軸となりながら大会運営にあたった。

また、研究会OBからも多くの支援をいただき、地域や世代間を超えた縦横のつながりを強く感じることができた。また、特に幼稚園関係者の積極的な参加により、図工・美術の連続性を考えていくよい機会にすることができたのは大きな成果であった。(ささき よしのり)